

---

# とある男の I S な話

ぱりお

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

とある男のISな話

### 【Nコード】

N2983Z

### 【作者名】

ぱりお

### 【あらすじ】

伊波涼太はどこにでもいる中学3年生の男の子。しかし、ある交通事故に巻き込まれ、早すぎる死を迎えてしまう。しかも目覚めた場所は天国ではなくどこかの研究所。

そこでであったのがISの登場人物篠ノ之束と量産型IS打鉄であった。

涼太「ありえない。こんなことあるわけない・・・。」  
そんな伊波涼太を交えたちょっとおかしいISストーリーが今始まる。

作者の初投稿作品です。よろしくお願ひします。  
それと作者はアニメと二次創作での知識しかないもので、そのとこ  
ろもよろしくです。

## プロローグ(前書き)

がんばります！

## プロローグ

### プロローグ

ドオオオン！！

その音とともに俺は宙に投げ出された。

ああ、死んだな。直感的にそう思った。

その日、俺こと伊波<sup>いなみ</sup> 涼太<sup>りょうた</sup>は上機嫌だった。なんせ2年間俺の片思いだと

思い込んでいた女の子にいきなり告白されたのだから。もちろんOKした。即効でOKした。

しかも「これから涼太くんってよんでもいい？」って

上目遣いで聞かれたときには死んでもいいって思ったよ。いやむしろ萌え死ぬところだった。

神様ありがとう！いるって信じてないけどありがとう！

ラブラブな俺達は手を繋ぎながら下校した。

やべえ俺今人生で一番幸せだ。彼女と喋りながらそんなことを思う。

だが楽しい時間ほどすぐ過ぎる。彼女の家に着くのはあっとゆう間だった。

「ばいばい涼太くん。また明日ね！」

花の咲いたような笑顔で手を振る彼女。手を振りかえし、家に入っていくのを見送る。

……ちくしょうかわいすぎるだろ！俺を殺す気かよくそっ！

ニヤける顔を両手で押さえながら歩き出した。あ、そういえばとあることを思い出す。

「小説買いにいくの忘れてた。」

帰りに買うはずだった小説のことをすっかり忘れていた。

家に帰る前に本屋に行こう。ここからそう遠くないはず。

5分くらい歩き本屋のある大通りに出た。近くの公園では子供達がサッカーをして遊んでいる。

楽しそうだなとおもいながら公園の横を通りすぎる。

そっぴゃ小さいときよくここでサッカーしたな。俺超へたくそだったけど……。

あのころディフェンスしかやらしてもらえん『プーーーーー  
ーーーーー』な、なんだ？

音の聞こえたほうを見ると公園にいた一人の男の子がボールを追って道路に飛び出していた。

トラックの運転手はあわててブレーキを踏んだがもう手遅れのうちだ。そのまま男の子に突っ込んで行く。

危ないっ!!!

考える前に体は動いていた。全速力でその場に向かい男の子を突き飛ばす。

直後に、俺はトラックに吹き飛ばされた。そして、

地面に叩きつけられ血を吐き出す。

「ぐはっ!!……はあ……はあ……」

なんとなくわかった。俺、死ぬだろうなあ。なんだか呼吸しにくいし。

それはそうと男の子をほつを見る。泣いているが無事のようにだ。

よかった……。

仰向けになり空を見る。むかつくほどきれいな青空だった。

神様の……くそつたれ……。

そつつぶやきながら、意識を手放した。

第1話 トリップしちゃいました。(前書き)

一応なんども読み直していますが、誤字などあるかもしれません。

それでもいいならどうぞー！

## 第1話 トリップしちゃいました。

??? side

ここをこうして、ここは・・・こうかな。え・・・あれえ？

あーやっぱりワンオフアビリティの容量が大きいせいかなー・・・  
それに腕パーツのせいで全体のバランスがおかしいかも。

うむむ・・・『緊急事態発生。緊急事態発生。』へ？

『侵入者を発見。』

侵入者！？ここがばれたって言うの？

でもどっやって・・・。

『現在、IS保管庫にいます。』

わたしを捕まえにきたのかな？それともISの技術を奪うため？

どっちにしる私の研究を邪魔するなんて、いい度胸だね！

どんなやつか顔を見てやろう、そしてココに来たことを後悔させてあげるよ。

私は保管庫に向かった。

中に入ってみるとそいつは床に倒れていた。どうやら気絶しているようだ。

勝手に人様の家にあがりこんでおいて何がしたいんだろうこいつは……。

あ、起き上がった。周りを見渡しているようだ。

いっくんと同じ年位の子かな。まあ関係ないか、そんなの。

「ねえ、君。勝手に家に上がりこんで何をしているのかな……。」

どうせ始末するんだしね。

涼太 side

「・・・た!・・・うた!」

・・・。

「・・・うた!・・・きなさい!」

ん。母さん?もうちょっと寝かせてくれよ・・・。

「何言ってるの!早く起きないと遅刻するわよ!」

・・・あーもうわかったよ。朝から大声だすなって。

まだ眠いが母さんがうるさいので起きる事にする。

だいたい今何時だよ。目を擦りながら部屋の時計を見る、ってあれ時計がない。

それどころか自分が寝ていた場所は鉄板の床だった。

なんで俺こんなところに・・・?

必死に寝る前のことを思い出す。

たしか、昨日は2年間片思いだと思ってた子に告白されたんだっ  
たよな！

もちろんokして、そのまま一緒に下校。家まで送って……。

小説買い忘れたの思い出して、本屋に行つて、

その途中の公園でサッカー……ん？……サッカーやってた子供  
が……!?!?!?!?!?!?!?!?!?!?

そつだ思い出した！俺トラックにひかれたんだ！

じゃあココは病院か……?いやいや、病院がこんなメタルチツ  
クな

場所であつてたまるか。てか工場にしか見えないし。

周りを見回してみると、ロボットのようなものが目に入った。

!?! あれつてもしかし「ねえ、君。勝手に家に上がりこんで  
何をしているのかな……。」

突然誰かに話しかけられた。声から察するに女性だろう。

でもなんだろ。この声、どこかで聞いたことがあるような……。

そんなことを思いながら、うしろを振り向く。

え……？

いやいやいや……ありえない。こんなことあるわけない。

「篠ノ之 東……？」

だってそこにいたのは俺がはまっていたアニメ【インフィニット・ストラトス】にでてくる登場人物 しののたはね 篠ノ之東だったのだから。

第一話 トリップしちゃいました。

「それで、君はなんでココにいるのかな？」

いや、まて本物の篠ノ之束なわけないだろ。なに考えてんだ俺。  
きつとコスプレしたそっくりさんに決まってる。

そつだ。絶対そつだ、ハハハばかだな俺！・・・落ち着けよ。

「い、いやあの、自分もなんでココにいるのかよくわかってなくて  
」。

本当のことだ。嘘はついてない、けど・・・。

「そんなデタラメ束さんが信じると思ってるの？」

うわ、めっちゃなりきってる。声も超にってるし。ってそんなこと  
はどつでもいい！

やっぱ信じてもらえないか・・・。とりあえず事情を話してみよ  
う。

なにも言わないよりマシな気がする。

「ほ、本当なんです！実は  
」。

「……トラックに轢かれて死んだとおもったら、ココで寝てた？

つくならもっとマシな嘘にしろよ。」

「嘘じゃないんですってば!？」

イラついている様子。あれ、これ逆効果だったんじゃない?。

「じゃあ例えば君は自分の家に不法侵入してきたヤツに『気付いたらココにいました』なんて言われて

ソレを信じられるの? ねえ。」

「そ、それは……。」

無理だ。信じられるわけがない。迷わず警察に通報するに決まっている。

「もういいよ。どうせ君はココで死ぬんだから。」

「ちょー！な、なんで!？」

「当然でしょ？東さんの秘密の研究所を見られちゃったんだから。」

「このまま返すわけにはいかないよ。」

カチャ。

女が銃を構える。俺は驚いて腰を抜かしてしまった。

そりゃびびるだろ。銃口向けられたのなんてはじめてなんだから。

「私も本当はこんなことしたくないんだけど、

居場所を知られるとめんどーな事になっちゃうから、しょうがないよね？」

しょうがなくなーよ。他に方法なんていくらでもあんだろ！

監禁とかさ！・・・どっちもいやだけど！

女はじりじりと俺との距離を詰めていく。

腰が抜けて立てないので、手で体を支えて後ろに下がる。

が、背中に何か当たった。たぶん壁だろう。

はぁ・・・せっかく生きてたのになぁ・・・。

俺は覚悟を決め、目をぎゅっつつぶる。

直後に銃声、じゃなく後ろで何か音がした。

キュイイイイン！

な、なんだ？

「まさか・・・反応してる！？でも彼はどう見たって男性だs・・・  
ブツブツ・・・。」

女がなにかつぶやいている。何をブツブツ言っているのか気にな  
ったがとりあえず

後ろで動いている何かを確認することにした。

「ま、マジかよ・・・。」

そこには同じくアニメ【インフィニット・ストラトス】に出てくるIS”打鉄”が置いてあった。

さっきチラッと見えたけど、やっぱりそうだったのか・・・。

じゃあ目の前のは本物の篠ノ之東で、ここはISの世界ってか!?

せっかく冷静になれたのにまたパニックってきた。ありえねええええええええ!?

「ねえ君。」

「(どうしてこうなったああああ(.....)へ?」

「じつは女の子だったりする?」

「んなわけねーだろ!どう見ても男だろーが!」

あ、やべえ。パニックり過ぎて口調が.....。

お、怒ってない、よな?

「やっぱり男性か……でもそしたらどうして……ブツブツ……」

よかったー怒ってないっぽい。

女は一通り悩んだ後、また俺に質問する。

「君。名前は？」

「伊波。伊波涼太、です。」

どうしたんだ？いきなり名前聞かれたけど、もしかして殺されずに

すむんだろうか……。

「そう。じゃあ伊波。君に2つの選択肢をあげよう！」

なんかいきなりテンションあがってる……ん？選択肢？

「1！ココでおとなしくやられる。」

ふざけんな。いやに決まってる。

「2!ココで私の研究をお手伝いする。」

「……は？」

「……2で。」

「おっけー。じゃあこれからよろしくね!伊波。」

「ま、まっってください。なんで急に気が変わったんです?」

不気味すぎる……なにか企んでるのか。

「ん?あーそれはね、君が世にもめずらしい、男性でISを動かせる人間だからだよ!」

「……そーゆーことか。つまりあれだ、モルモットになれと。」

正直嫌だけど死にたくないしな……。はあ。

「でも、いいんですか?得体も知れない俺に研究の手伝いなんかさ

せて。」

「問題ないよ。今から君にはこれをつけてもらうから。」

と言つてなにかを腕に取り付けられた。・・・腕輪？

「伊波がなにかしようとしたらそれが手首をスパーン！だから大丈夫っ！」

大丈夫じゃねえ！？なに笑顔で物騒なこといつてんのこの人！？

外れる！この野郎！！スパーンなんて嫌だ！！！！

「これからよろしくねっ！」

「・・・よろしくお願ひします。」

ホント・・・神様のくそつたれが・・・orz

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2983z/>

---

とある男のISな話

2011年12月10日16時50分発行